第１回北九州ＥＳＤ検討会　議事要旨

【事務局】
ただ今から、第１回北九州ＥＳＤ検討会を開催する。
それではまず、主催者である北九州ＥＳＤ協議会代表近藤　倫明よりご挨拶を申し上げる。

【代表】
まずは、ご参加いただいたことに厚くお礼申し上げる。
北九州 ESD 協議会は 14 年前、2006 年に設立し、国連大学より RCE の認定を受けた。ご存じの通り、2005～2014 年まで、日本が提唱した「ESD（持続可能な開発のための教育）の 10 年」の途中で本協議会も設立し、最初は 2006 年から 2014 年までという形でアクションプランを作った。
それから、その 10 年が終わり、新たなアクションプランということで、2015～2019 年の 5 年間のアクションプランを策定した。そのときに、私も ESD に関わりを持つようになり、実際に今のプランの検討会の座長を務めた。そこには本協議会の初代代表、副代表も参加されて作られた。
今日はそのプランの成果と課題をまとめたあとに、次期 2021-2025 年のプランを皆様のお力を借りて、つくってまいりたい。
今日は限られた時間でたくさんの意見をいただきたい。活発な意見をいただきたく思っている。

【事務局】
座長については、北九州ＥＳＤ協議会　近藤代表にお願いする。また、代表が出席できない場合は、日髙運営委員長に座長代行をお願いする。
では早速、議事の進行を座長にお渡しする。

【座長】
それでは、議事に入る。
最初に事務局から、検討会の趣旨等について説明いただく。

【事務局】
まず、検討会の趣旨について、環境未来都市実現を目指す北九州市で進めている、持続可能なまちづくりを担う人材育成活動の普及を図るため、北九州 ESD の今後のあり方に関し

ての総合的な検討及び北九州 ESD 協議会が策定した「北九州 ESD アクションプラン」の改定に向けた助言や専門的な意見を頂くために、この検討会を設置している。

2014 年「ESD に関するユネスコ世界会議」で「ESD に関するグローバルアクションプログラム（GAP）」が採択され、ESD のさらなる取組が強化されて、現アクションプランが策定された。

一方、2015 年 9 月の国連サミットで SDGs が採択された。SDGs は、2030 年までの国際目標で、17 の目標、169 のターゲットから構成されており、世界規模での取組が重要とされており、その中でも「教育」は、人材の育成に寄与し重要な役割を果たしている。

しかし、北九州の現アクションプラン（2015～2019）には SDGs が反映されていない。

2019 年 12 月国連総会で、GAP の後継の「ESD for 2030」が採択された。これは、ESD が質の高い教育に関する SDGs に不可欠な要素であり、その他の全ての SDGs の成功への鍵として、ESD は SDGs 達成の不可欠な実施手段であることが明記されている。

よって、今回の改定にあたり、「ESD for 2030」を受けて、国では「国内実施計画」を策定予定されているが、国の動向を踏まえつつ、協議会会員によるワークショップによる意見交換、この検討委員会の委員でもある運営委員の皆様の活動経験、外部の学識経験者の皆様の意見を取り入れていくことで、広く北九州らしいプランの改定を進めていきたい。

対象地域は、現アクションプランと同じく北九州地域で、計画期間 2021 年～2025 年までの 5 年間である。

今後のスケジュールは、本日の第 1 回目のアクションプランをもとに、素案の作成を行い、素案をもとに第 3 回の会員向けのワークショップを 12～1 月に、第 2 回検討委員会を令和 3 年 1～ 2 月に行い、3 月には新アクションプランの案を策定予定としている。その後 4 月にパブリックコメントを募集し、5 月には第 3 回検討会を行い、6 月総会にて承認というスケジュールである。

【座長】

それでは、議事（２）の「北九州ＥＳＤアクションプラン 2015～2019　重点的取組事項と成果・課題」について、まずこれまでどのような検討を行ったのか、事務局から説明いただく。

【事務局】

まず、別紙 1 に現アクションプランの 20 の指標の達成状況を記載している。達成されたものが 12 指標、未達成が 6 指標、事業終了が 2 指標になっている。

別紙 2 には、昨年 10 月に会員へのアンケートを実施した結果を記載している。

別紙 3 には、2015～2019 年の事業実施状況を記載している。

別紙 4 には、ESD カフェ参加者の意見として、今年 2 月 11 日（34 名参加）と 7 月 26 日（36 名参加）に、九州大学の加留部先生にファシリテートしていただき、ワークショップ

を行った際の意見を記載している。
　それを全てまとめたものが配布資料４「現アクションプランの取組状況に係る報告」である。

【座長】
　配布資料４、５をもとにして、重点取組事項ごとに、これまでの成果と課題について確認したい。説明は、運営委員ステークホルダーと事務局からお願いする。
　では、地域・ネットワークについて説明いただく。

【委員】
　ステークホルダーとして市民の活動に関わらせていただいている。2006 年頃から ESD に関わって、さまざまな活動も体験しており、皆様の活動も見させていたき、充実した時間であった。
　私は市民活動団体にさまざまに関わり、ESD の在り方を大事に思っている。
　NGO とともに提唱されてきた ESD の考え方というものについて、私どもは NGO、NPO の活動を中心に考えている。市民センターと拠点事業は別のところで皆様が展開されているので、今後益々、NGO、NPO との連携が必要になると考えている。ステークホルダーとしての役割が増してきていると感じている。
　市民センターの皆様の活動を拝見・参加し、個のつながりになる傾向を感じる。一方、NGO はミッション型で、一般的に普及であったり訴求であったりの可能性も高いのではないかと思う。
　現行のアクションプランのときも NPO、NGO の視点を ESD でしっかり持っていただきたいと意見を重ねてきた。
　資料の中で、市民センターの周囲という言葉があったが、どのあたりを指すのか教えていただきたい。
　事務局体制について、現行のアクションプランのときも期待して色んな意見を出させていただいた。今はコーディネーター、事務局長もいるが、私ども活動家はどのようにして事務局と共にやっていけるか、この５年間、ステークホルダーといえども、月１回は学生中心の形であった。私どもも市民団体として、ESD の加盟団体として感じることは、この５年間で一緒にやれるものが薄くなってきたと思う。ぜひ、一緒に活動していきたい。
　今、活動している中で３０代の子育て世代が、勉強も熱心で、活動もなさるから、子育て世代からユースへつながるのではないかと考えている。世代を取りこぼしたくないと強く思っており、そこにステークホルダーの役割もあるのではと考えている。
　協議会のコーディネーターが一人で頑張るばかりではなく、互いに教え合えることもあるのではないか。私たちの経験や、知識などには、協議会の資料にはない部分もあるのではないかと考えている。

協議会を組織のプラットフォームとして、今後の可能性を開いていくならば、私たち市民の在り方というものを、学生もその他の方々も参加できる形のアクションプランを考えていきたい。

各ステークホルダーの連携がまずあって、そこから外部の NPO、NGO、それから行政の方というようにつなげていけるのではないか。

最後にコロナウイルスの関係で、市民生活の変化の中に人権という視点を大きく持たないといけない時代がきているのではないか。方向性として、これからは人権の尊重ということは ESD の大事な柱として、より深く考える時代がきているのではないか。そういうことを含めて一緒に行動していけたらと思う。

【座長】

質問等については、のち程重点項目等の後にまとめてお受けしたい。ご報告を進めていく。

続いて、多様な教育の場について、説明いただく。

【委員】

この 5 年間の成果だが、私どもはまなびと ESD ステーションで元教員をしており、まなびと ESD ステーションが立ち上がってちょうど 2014 年が 3 年目であった。当時、大学生のプロジェクトが 25 個くらい立ち上がっており、まさしく 10 大学の学生たちが多様なプロジェクト、多様なメンバーで作り上げていく中で深い学びがあったのではないかと思う。別紙 1 のなかに数値化された成果が記載されているが、当時は 2 万人から 3 万人位の利用者がまなびと ESD ステーションに来ていたのではないか。

まなびと事業終了後、一時期増えたものの、最終的には指標は未達成という状況になったが、当時は、25 のプロジェクトが動き、多様な学生が多様な学びを実施していく中で色んな NPO との協働も生まれた。その中で今も続いているグリーンバート、これは学生だけではなく、社会人、高校生等、多様な人々が参加し、まちをきれいにししていく、そこから新しいつながりが生まれるという取組だったと思う。実施回数も全国 1 位という素晴らしい成果を上げている。このきっかけもまなびと事業だったと思う。

他にも自分が深く関わっているカタリバというプロジェクト、マイプロジェクトにおいては、事業終了後 2 年間は EDS の事業のなかで位置付けされて、「私が身近なものを変えたい」をロジックとしてプロジェクトにして実行し、それを成果として発表する、そういった場を作ってきた。これに関しては全国 1 万人の高校生が事業に参加している。九州では唯一うちの団体がまなびと ESD ステーションを拠点に展開を続けている。そういう成果が上がった。

一方では色んな他の機関、教育機関との連携がまだまだだったかと思っている。別紙 1 の成果の中のユネスコスクールの件が未達成の表記がある。教育機関との連携は、高校に関しては少しずつできていたと思うが、小学校、中学校に関しては十分でなかったと思う。

そのようにある程度の成果を上げてきてはいるものの、多様な学びを深めていくには課題もある。今後5年間ではそういった部分をもう少し強化していきながら、多様な学生たちと社会人とやっていくという事業も生まれているので、今後もそういった形で検討していければと思う。

【座長】
次は、企業について説明いただく。

【委員】
これまでの成果は、企業に対するSDGsの講習が一つあげられる。
それから北九州市 SDGs 未来都市アワードができたので、企業に参画するように働きかけた。主にやったのはこういったことで、実際はなかなか達成ができなかった。
その最大の理由は、ESD について私も理解が十分ではなく、人権があり、ジェンダーがあり、環境があり、色んなものがたくさんあり、企業に話しても ESD って何かということで進歩がなかった。字面からいうと、Education for Sustainable Development なので、いわゆるサステナブルな世界をつくるための教育である。そのために企業も参画という一つの流れであれば、我々も説得できたが、ESD と色んなものがあり、働きかけが難しかったというのが、自分の反省も含めてある。
2021 年からの5年間には、企業等が参画できる下地ができてきたのではないかと思っている。ESD というのは「SDGs を達成するための教育」で、SDGs となると企業が目の色が変わって、それを取り込まないと企業の将来はないとなり、先進的な企業はサプライヤーも含めてちゃんと SDGs を解釈し、取り入れておかないと入札さえも参加できないというような時代に変わりつつある。そのために社内の人に教育するだけではなく、新しく入ってくる人もきちんと教育されていることが必要だと思う。これからは企業としてどういうニーズがあるか、例えば学生が企業にどういうものを求めるのか、SDGs の視点で考えていただき、そこにつなげるように計画をしていきたい。
将来的な夢であるかもしれないが、北九州の学生がスタートアップして、自分たちで事業を起こすところまで結び付けられれば北九州の発展につながるのではないかと思う。
今の協議会のメンバーを見ると、北九州市立大生が多いが、我々のメンバーの中には、会長が北九州大の文系、社長が東工大や京大の理系が一緒になってスタートアップして会社を作ったという事例もある。北九大と九工大の学生が一緒になって、新しいスタートアップで作るという可能性も十分にあると思う。そういう方向で新しい計画が立てられればうれしい。

【座長】
それでは引き続いて行政機関について、説明をいただく。

【委員】

まず現アクションプランの行政に関する指標については達成している。ただし、ESD 協議会の会員による ESD カフェで、課題として行政主導ではなく市民主体を求める意見や、行政組織内での ESD の実践が不足しているというなどの意見が出された。

2015 年に SDGs が提唱され、北九州市は、2018 年に SDGs 未来都市に指定され、SDGs 未来戦略を掲げて、その事業に取り組んできたということが背景にあり、成果として北九州市役所に限って言えば、市職員に対する SDGs の研修は非常に手厚く行われ、全ての事業に対して SDGs の中で整理するということが既に積み重さなっている。

ただ、先ほども報告にあったが、ESD と SDGs の関係性が十分に整理をされていないので、ESD では見えてきていない。特に外の会員には ESD の取組が見えていなかったため、こういう評価につながったのかと思う。

ESD が SDGs 達成のための教育ということで整理をするのであれば、配布資料 5 にあるように、北九州 SDGs 市未来都市アワードを ESD 協議会と一緒に創立した。これが大きな成果と思う。

今後の課題は、協議会が行政職員の人材育成にどのように関わることができるのかということを再度検討する必要があるかと思う。

【座長】

それでは共通事項である普及・啓発発信と、推進体制について、事務局から説明いただく。

【事務局】

まず、普及・啓発・発信について説明する。

普及・啓発・発信については、6 つの指標が設定されており、達成 4 、未達成 2 であった。

未達成のものは、ESD の認知度と普及活動件数及び参加人数である。

一方、達成されたものについては、1 つ目が市民センターでの出前講座などの講座数。2 つ目が、一昨年は協議会で実施、昨年からは市と共同して SDGs アワードを実施した。3 つ目が、年 2 回「未来パレット」という広報誌を発行して広く情報発信を行っている。4 つ目は、国内外の RCE 団体との交流ということで、調査研究・国際プロジェクトが毎年行っている韓国スタディーツアーを実施している。また全国 RCE 実務者会議が毎年行われており、一昨年北九州市で開催した。

一方、課題については、アンケート結果や ESD カフェで、ホームページ、SNS での情報発信、更新が十分ではなかったという意見があった。今年の 4 月から、ホームページを刷新して、未来キャンバス、フェイスブック、会員活動動画の掲載など情報発信に努めている。

また、アンケートの結果で「ESD が難しい、分かりにくい」「他の会員がどのようか活動をしているかわからない」「ESD と SGDs の区別がわからない」等の意見が多くあった。現

在、会員活動報告会の開催や ESD カフェを行い、会員間交流を深めてまいりたい。

一方、出前講座の実施を増やしてはどうかという意見もあったため、昨年「出前講座カタログ」を更新し、小・中学校を訪問し、小・中学校や家庭教育学級で活用できないかお願いした。

次に、推進体制について、現アクションプラン策定後、協議会は拠点を現在の「まなびと ESD ステーション」に移し活動している。また、ステークホルダー活動推進、調査研究・国際、イベント、ブランディング、人材育成・発掘の 5 つのプロジェクト活動を開始した。

また、2017 年からコーディネーターを配置し、会員、地域、各プロジェクトをつなぐ取組を実施している。

北九州市立大学地域創生学群の学生及び各プロジュクトリーダーをサブコーディネーターとし、会員間の交流を促し、協働の取組の拡充を図っている。特に、北九大の学生は、毎月「ツキイチの集い」を自分たちで企画し、実施している。

結果として、2017 年「地方自治法施行 70 周年記念総務大臣表彰」を受け、昨年は「まなびと ESD ステーション」が位置する魚町商店街が、第 3 回「ジャパン SDGs アワード」内閣総理大臣賞を受賞するなど活動が広がっていると思われる。

しかし、課題として「会員間のネットワーク作りが必要」「会員間の活動をよく知ることが大前提」「現体制では、プロジェクトの枠組にとらわれて広がりに限界がある」という意見等もあり、協議会の新たな枠組みを検討し、会員とのパートナーシップを深めることが必要と考え、次世代の人材育成を育むプロジェクトが必要ではないかと思われる。

また、コロナ禍で「まなびと ESD ステーション」の利用者が大幅に減少する中、拠点の意義が変化し、拠点のあり方の検討が必要ではないかという意見もあった。

【座長】

それぞれのステークホルダーの委員、事務局から現行のアクションプランの成果と課題について、報告していただいた。

ここで、説明について、疑問点があれば、質問等が受け付ける。

【委員】

私は最初から、普及・啓発のための資料を作る等、さまざまなことをやってきた。その中で一番力を入れてきたのはまなびと講座である。

私が目指したのは学生と会員のつながりを作ることで、聞き書きプロジェクトを行い、そこから市民センターを中心に「おしゃべり工房」という企画が実施され、社会教育の観点で ESD が広がっていると思う。これをどのように展開していくかということが、2021 年からのアクションプランで考えなければならないことと思っている。

また、北九州市がＳＤＧｓ未来都市になぜ認定されたかというと、ＥＳＤの基礎があったからである。ジェンダーをやった人たちと、環境教育の人たちが合体してＥＳＤができて、

ESD を踏まえてＳＤＧｓの認定になった訳であるから、このステップを行政職員が分かっていなかったら意味がないと思う。特に行政の方へ、それを伝える手立てをアクションプランに反映していただきたい。

【座長】
実は、現行のアクションプランで重視したのはそこで、北九州方式のＥＳＤである。他と違う点は、女性が環境問題に取り組み、ジェンダーとつながってきた歴史は次のアクションプランにも生かされると思う。

【委員】
北九州市の SDGs のセクションに話を聞いても、ＥＳＤの話は全く出てこない。過去はつながっていなかったが、これからはＳＤＧｓのセクションと我々が綿密に連携をとらないと、市役所の縦割り行政では続いていかないと思うので、ＳＤＧｓを主導している部署とＥＳＤが強い連携の下に計画を立てていくことをお願いしたい。

【座長】
ＥＳＤとＳＤＧｓの関係を整理する必要があるということ、ＥＳＤはＳＤＧｓを達成するための教育実践活動であることを明確に位置付けることが必要だろうと思う。

【委員】
アンケートで、もっと高齢者と若い人が交流してほしいとあったが、本当に必要なのか。必要であるならば、具体的にはどういう形で行うのか、つきつめて考えていただきたい。

【座長】
先ほど、委員から学生と市民の交流などの発言があったので、次期アクションプランの中ではどういうふうにするかということを考えたい。
それでは、次の議事に進める。これまでの成果と課題の洗い出しができたところで、次期アクションプランの枠組みについて議論を進めたい。議事（３）から（５）まで、まとめて事務局から説明いただいて、議論に入る。
それでは、事務局から、配布資料５に基づいて説明をいただく。

【事務局】
次期アクションプランの枠組みについて説明する。
ESD は SDGs 達成に向けた人材育成であるため、「SDGs 未来都市北九州の未来戦略（ビジョン）」を基盤にして、ESD で目指すまちの姿を考えるということで、「真の豊かさ」とは、経済的・物質的な豊かさだけではなく、精神的な豊かさを統合したもので、人が幸せに

生きていくための条件である。そのうえで、「ESD で目指すまちの姿」を、「個人や団体それぞれが、考えて行動し、お互いにつながり、世界に広がって、持続可能な社会の実現に向けて、みんなで一歩を進めるまち」としている。

また、各ステークホルダーの役割として、ESD 協議会は、市民・NPO・企業・教育機関、行政が加入しており、各ステークホルダーが連携して活躍するため、それぞれの分野における役割を相互に理解することが重要と考える。

各ステークホルダーの役割を整理すると、

・市民・NPO～誰もがいきいきと活躍する地域づくり

・企業～本業と SD との調和。次世代にチャンスを提供するとともに優秀な人材を獲得

・教育機関～より良い社会と人生を築く次世代の育成

・行政～活動の場と機会を提供し支援

と考えた。

次に、次期アクションプランの方向性について、世界や国内の状況変化や、現アクションプランに関する会員意見、成果と課題を踏まえるとともに、コロナで人や社会のあり方が変化しつつあり、影響が当分続くと考える。そのため、次期アクションプランの方向性を、ウィズコロナの時代にあって新たなチャレンジにも取り組みながら、人と人、人と社会の関わりのなかで学び合う ESD を推進し、SDGs 達成を目指し活動する、特に、将来の北九州を担う次世代の育成や、SDGs 活動の活性化が予想される企業との連携に取り組むとしている。

まず方向性の 4 つの視点を説明する。

「北九州方式 ESD」は内外から評価され会員にもこれまでのように引き続き活動したいとの意見があったため、継続したいと考えている。

次に、SD（持続可能な社会づくり）の理解や周知と、SDGs17 の目標を意識した取組。SD の理解浸透に課題があり、加えて ESD と SDGs の整合が必要と考える。

第三に、自立し、かつ相互につながる学びの輪の広がり。各会員が十分に自立して活動し、加えて、団体相互の交流と活動の連携を促進する。また、会員以外の活動者や ESD 拠点、国連大学等に連携が広がっていくことを目指す。

第四に、誰一人取り残さない学び、誰もが活躍しやすい環境づくり。SDGs の「誰一人取り残さない」は重要な観点であるため反映すべきものと考える。

プランの概要について、期間は 2021 年～2025 年の 5 年間。

プランの柱について、現アクションプランはステークホルダーごとに重点的取組事項を設定したが、共通の課題が見られることから、取組の内容に即して柱建てを考えた。

（1）　活動団体による自主的な取組の促進

・普及啓発　・地域ネットワークづくり　・国際交流　・調査研究　等です。

（2）　ステークホルダー同士の連携・地域外との交流

・ステークホルダー間や他の ESD 拠点、国連大学との交流　・活動のマッチング

（3）　次世代の育成

・子ども達の体験学習（グリーンギフトプロジェクト）　・異なる世代や企業など、他ステークホルダーとユースの連携

（4）協議会の推進体制と活動拠点のあり方

主な取組に関しては、現アクションプランの取組の継続に加え、プランの柱に沿った新たな取組の検討が必要であると考えるので、委員の皆様のご意見をいただきたい。

最後に、取組の成果が測定する成果指標と 5 年間のロードマップを定める。成果指標に何を上げるか検討が必要と考えている。

【座長】

次期アクションプランの枠組みについて説明いただいた。では、意見交換に移りたい。

まずは運営委員以外の委員の皆様からご意見をいただきたい。

【委員】

北九州市の ESD の取組という、持続可能性に向かってこられた姿に感動と感銘を受けている。持続可能性というのはここ１～２年に出てきたわけではなく、ずっと前からあって、それを追求する姿というのは何十年も前からあったのではないかと思う。

北九州市の市民は、こういった環境に向かって公害を克服され、ジェンダーの啓発に向かわれてきたという、このままでは持続不可能だという場面にいち早く受け止めてこられたからこそ、持続可能性を追求されてこられたのではないかと思う。

そういう中で、ESD というのは大変重要な言葉であるが、SDGs という言葉が出てきたために、どうも薄くなってしまった感じがする。その両者の関係が分からないということもある。私自身、ESD と SDGs の関係が不明瞭であるのは、サステナビリティという言葉が大変「漠」としているからだと思う。そういう「漠」としている中で、明確にすることができた一つとして、おそらく SDG というものが出てきたことによるのではないか。持続可能性に向かっていくということを明確にするためには、まず、ゴールというものをはっきりする必要があるのではないか。そういう意味でゴールがはっきりしたので、そこに向かうことがはっきりし、そのための人づくりはどうあるべきか、これが ESD ということになろうかと思う。

そしてもう一つのサステナビリティという「漠」としたものを明確にするためには、その人づくりに向かう方法論を確立することであろうかと思う。そういう意味でも、ESD はしっかり方法論が確立されているので、活用できればと思う。

持続可能な社会に向けた人づくりの手法、すなわち、北九州市において確立された北九州方式を改めて再認識、再確認して、この方式を見える化し、それを使っていくことによって、未来に向かってゆく、そういう意味では、私は SDGs と ESD の関係を明確にしていく上で「SDGs の後付け」という言い方をしている。

持続可能性を何十年も前から追求されてきた方もいる。やっていたことが SDGs でいうと何番目になった、SDGs は後からきたのだ、自分たちが既に向かっていたのだという自己肯定感、認識、自信。このことによって、さらに向かっていこうという意欲が出てくるのではないかと思う。

持続可能性に向かう人材育成には、そのような人たちを探し出し、そのノウハウを共有し、人づくりに向かう実践を皆で計画していくということを次のアクションプランでお願いしたい。

【委員】

九州地方の ESD 活動支援センターの取り組みを踏まえながら、発言させていただく。

ESD 界隈からすると、SDGs の状況は水を得た ESD、生き生きとしてきたと感じる。この十数年はあまり認知されずに苦労を重ねてきた中で、ある種分かりやすさとパッケージ、世界共通の理解のあるステージとして SDGs が出てきたことによって、やっとやってきたことを受け入れていただける素地ができてきた、水を得た魚のように生き生きと動き出したことが多くあるのではないかと思う。一方で、各委員からあったように懸念があり、SDGs というトンビにに油揚げをさらわれるような印象を持つが、ESD の歴史を踏まえないと、SDGs に未来はないという問題意識かと思われる。

過去の歴史に気脈を通じ、今なお息づかせているという、人材育成の結果、今があるということを改めてこのアクションプランに示すべきところと思う。

ESD というと SDG s の 4 番に陥りがちと思うが、4 番を強く言うのではなく、１２の 8「作る責任、使う責任」の中の「自然と調和したライフスタイルに関する情報と意識を持つようにする」に協議会の活動が持っているポテンシャルや取組が一番フィットするかなと思う。矛盾するかもしれないが、エデュケーションという殻を協議会がどれほど破っていけるのかということである。ESD「E」の理解を、「Education」からさらに広げて、「Empowerment（エンパワーメント）」であったり、あらゆる手段をとるという意味で「Everything」for SD というくらいの議論がこのアクションプランの検討ではあっていいのではないかと思う。教育を軽んじるわけではないが、先端都市として北九州市が抱えている悩みは最前線に直面したものとして自信をもっていいのではないかと思う。

【委員】

まずは、初めに御礼を申し上げる。先日、今回の大牟田の豪雨災害への北九州の皆様からのお見舞いをいただいた。なんとか学校も再開し、子ども達も頑張っていつが、まだまだ復旧復興にむけて取り組んでいかなければならない。大牟田も今まで ESD を取り組んできたので、持続可能なまちづくりに向けて頑張っていきたい。

まず大牟田は、北九州市をモデルとしてこれまで取り組んできた。北九州市の歴史ある取組、市民を挙げて取り組んできたという強み、この北九州方式 ESD、これは日本に誇れる

ものだと思う。

大牟田もこれまで、学校教育を中心に取り組んできたが、まだまだ、地域・市民を巻き込んでいかなければならないと思っている。北九州市はたくさんのステークホルダーの協力の下に ESD、SDGs に取り組んでいるということはすごいと思う。やはりさまざまな形で連携を図っていかなければならないが、多様な連携から重層的な連携に進んでいかなければならないと思っている。

北九州市の場合は、さらに重層的な連携を図ることによって ESD、SDGs が進んでいくのだろうと思われる。そういう取組を一つのモデルとして、北九州市から日本に発信していただければありがたい。

私は ESD、SDGs を進めていくときに、特に学校教育関係では、二つのキーワードがある。一つは「主体性」、もう一つは「行動化」。やらせられ感の活動ではなくて、どう自分が考えてやっていくかが大事だろうと思う。

先ほど「SDGs は ESD の後付け」と発言されたが、私は、「意味づけ」、「価値づけ」と言っている。子供たちの行動がどのような意味をもち、どのような価値があるのかということをきちんと評価し、子供に返してあげる、それぞれの活動をしている方に返してあげる、確認をするということが大事だろうと思う。自分たちが主体的に行っていることはどのような意味があるのか、そしてどのような社会貢献につながっているのか、まちづくりにつながっているのかが自覚されなければならないと思っている。そういう認識ができる場所が交流会であったりカフェであったりと思う。なによりも子ども、大人といった発達段階に応じて、自分のできることがあるかと思うため、そういう面での主体的な行動を促していくようにしていかなければならないと思う。

先ほど、次期アクションプランの方向性の中で、「SD の理解や周知、SDGs の目標を意識した取組」とあったが、私は、できれば、SD ではなく、ESD があったほうがいいのではないかと思う。

ESD と SDGs の関係をもっとわかりやすくしていかなければならないと思う。ESD の理解と SDGs の関係性を明確にしていったらどうかと思う。

北九州市の取組が全国のモデルとなっていくので、期待したい。

【委員】

私は普段、大学で学生と一緒に SDGs のプロジェクト、最近ではウィズコロナを交えて、ウィズコロナ時代のデザイン、それをどう SDGs に絡めていくかというプロジェクトをやっている。

学生とこういった活動をする上で問題になるのが、言葉の使い方である。SDGs という言葉は何となくわかってくれるのが、そこに ESD という言葉が入ってくるととたんに「？」が浮かんでくるような状況がある。ESD と SDGs の分かりにくさは、学生や一般の方とフ

ァーストコンタクトをとるときのコミュニケーション速度を遅めてしまう気がする。ESD 北九州方式というのはこれまで培ってきたものであり、このまちの誇りとするもので大切にしなければいけないと思う。しかし、コミュニケーション上の問題として、一番最初に、ESD と SDGs を全面に出していくのか、それとも SDGs を先に話して徐々に ESD を理解してもらうのか等、出し方の例案など考えたほうが学生なども分かりやすいのではという気がする。

【委員】

私からは３点プラス１でお話させていただく。

１点目は、北九州市は「青空がほしい」運動から始まって理念をもって活動されている方がたくさんいらっしゃる。ESD は人づくりなので、先人の思いを後世に残していかなければならないと思う。その時に学び合いの場が重要になると思っている。ウィズコロナの時代でリアルに集まれる機会は少ないかもしれないが、大人から若い人たち、大人同士が学び合う、そういったことをさらに加速させる必要があるのではないかという気がする。

２点目は、それと関連して学校教育と ESD 協議会がもう少し関わる場所があってもいいのではないか。例えば、小中高と企業、NPO をつなぐ役割であるとか、最近は授業で ESD 含め SDGs に関することも行われてきているので、もっと協議会が貢献することはできるのではないかと考えている。

３点目は、ESD と SDGs は分かりにくいということが一般的にはあると思う。分かりやすければいいというものではなく、かなり複雑だと思うが、多くの方が理解していただくためには上手な伝え方が必要かなと思う。スローガンを設定される場合は、何か分かりやすい言葉、浸透しやすいキーワードを作りながら、うまく広報していくことが求められるかと思う。

プラス１は、私が言うことではないかもしれないが、北九州市役所の部署融合はしたほうがいいかと思う。皆思うところは同じではないかと思うので、サステナブル推進室など、作っていただきたい。

【座長】

それぞれの委員の立場から、多くのエールをいただきながら、また期待をされながら、次期アクションプランに対してご意見をいただいた。ここからは、自由に意見を交換したい。ここで話せなかったことでも事務局に連絡いただければ次期プランのほうに反映させたい。

【委員】

ESD や SDGs が、誰かがやっていることということで、自分のことにしていないというところが気になるところである。

今年１月に「市長と気軽にトークタイム」に ESD 協議会が出席したとき、市長に、市民

がどのようにESD・SDGsを理解し、深めていくか、何かいい方法はないかと尋ねられた。私は市民の最前線にいる仕事をしているので、市民目線で言うと、市内にある１３０の市民センターがESDの拠点になれておらず、市民センターの館長・職員全てが十分に理解も深まっていないと感じる。そこに、今度はSDGsが出てきて、市民から頭文字３文字はやめてほしいといわれている。

北九州市は「人権文化のまちづくり」と銘打っており、生涯学習・社会教育とESDがどのように連携していけるかは、縦割り行政のなかで、市民にいかに歩み寄っていけるかという模索だと思う。昨年、生涯学習課と環境学習課と連携して１つのESDの研修会を行うことができた。それをもっともっと継続して市民に理解を深めるべきではないかと思う。

【委員】

今年４月に市民センターで子供たちにSDGsとESDの違いを説明したが、子どもたちは正直ピンとこないということを実感した。

私自身も子どもたちにもっとわかりやすく説明できなく、勉強不足を感じた。その点を考え今後は進めていきたい。

【委員】

本日参加して改めて感じたのは、学校教育が連携していくことがいかに大切かということである。

今年度、３、４年生に「わくわく北九州」というSDGsの視点に立った地域教材資料集を配布し、各小学校で活用してもらっている。今年度は中学校版を作成している。

改めて学校現場を考えた場合に、ESD に比べて、SDGs という言葉の方が認知されていると思う。１～２年前を振り返ってみると、言葉自体を知らないといった先生方や児童・生徒ばかりだったが、昨年から今年度にかけて、認知度は上がってきたと思う。内容について、答えられない児童・生徒がいるかもしれないが、徐々に浸透しているとは感じる。そこで、前述の「わくわく北九州」や、中学校版の地域教材資料集をうまく活用していくことが大事かと思う。

個人的な考えでは、SDGsを勉強して考えることは、まちづくりであり、社会づくりであると考えている。どのようなまちを作っていくのか、それはSDGsの各ゴール、視点に沿ったものであるべきだし、SDGsの視点に沿った人材育成は正直、１年、２年で達成できるものではないと思う。現在のジュニア世代、小学生ないし中学生が１０年後、２０年後に実際に社会を作っていくので、今後 SDGs の知識を身に着けた上で、知識をどのように実用化するか、活用するかという点が学校現場に求められると考える。地域教材資料集を配布したのちに、どのように教育していくかが重要である。

学校現場だけで足りないのは、どこで、どのように活用するのかという、出口を与えていくことだと思う。子どもたちが社会とつながってゆく活用の場を学校現場で与えて、育成し

ていくことが大事だと思う。

【委員】

今、大学で「環境都市としての北九州」の授業をやっており、生徒たちに環境首都検定も受けてもらっている。これは選択科目だが、それを受けてくる学生でも ESD を知らないということ生徒は多い。

配布資料４の北九州市が行っている 3,000 人を対象にしたアンケートでも、ESD の認知度は５％に留まっている。2019 年度にはそのアンケートすら止めているということを拝見した。ただ、言葉を意識しなくても、普段このような課題意識があって、実際に行動している方はかなり多いという結果になっているので、ESD を表に出していかなくても、SDGs についてもっと学んでもらうということを協議会の目標にしてもいいかという気がする。ESD が消えてゆくのではないかという懸念はあるが、今が正念場、分かれ道ではないか。SDGs の市のホームページでも ESD は扱いが小さくなっている。特別なものではなくて、全部に関わるのだということをいろんな方に知っていただけたらいいかと思っている。

【座長】

本日出たさまざまな意見を、次期アクションプランの素案づくりに生かし、次回の検討会は素案についてさらにみなさんのご意見をいただきたい。

今日は初めてのリモートの会議で、限られた時間のなかでたいへん有意義なご発言をいただいた。では、事務局に進行をお返しして、今後のスケジュールについて説明いただく。

【事務局】

第２回の検討会の開催は、来年１月から２月を予定している。

本日いただいたご意見を活かし、協議会の会員とワークショップで議論を重ねて、アクションプランの素案を作成していく。

次回は、そのアクションプランの素案について、重点的に協議したいと考えている。

本日の検討会は、これを持って閉会とする。